

V 2016 (平成 28) 年度 全学 FD 教員研修会実施報告

1. 実施概要

今回は、京都外国語大学マルチメディア教育研究センター教授 村上正行先生を講師に迎え、途中、参加者間での意見交換をまじえた研修会を実施した。講演では、学生の変化について「デジタルネイティブ世代」である現在の学生の状況が、具体的な事例をまじえて紹介され、これらを理解したうえでアクティブ・ラーニングをはじめとする授業設計を行うことが重要であると指摘された。

また、大学におけるFDのありかたについても触れられ、伝達講習で大学教育についての一般的な知識を共有したうえで、相互研修で自大学の文脈に根づいた取り組みを共有するのが有効であるとの提案がなされた。

日 時：2017 (平成 29) 年 2 月 9 日(水) 10:00 ~ 12:00

場 所：ユージニア館 大講義室

講 師：京都外国語大学大学マルチメディア教育研究センター 村上 正行教授

タイトル：「現代の学生気質を踏まえたアクティブ・ラーニングを考える」

コーディネーター：FD委員会（向山委員長、大川委員、中里委員、藤原委員）

出席者数：

副学長	人間文化学部		生活福祉 文化学部	心理 学部	教員 出席者	教員 現員数	参加率	職員
	英語英文	人間文化						
1	8	7	14	13	43	67	64.2%	3

2. 現状と今後の課題

本年度の全学 FD 教員研修会にはインストラクショナルデザイン理論や FD の企画・運営に詳しい講師を招聘し、現在の学生気質の分析からアクティブ・ラーニングの方法論など幅広く授業設計に関わる内容の研修を実施した。出席者数は上記の表に示すとおり専任教員の約 3 分の 2 であり、昨年の 78%には及ばなかったもののほぼ例年通りとなった。なお、事前に届け出た欠席者については昨年同様、3月に開催される第22回FDフォーラムへの出席を本研修会への出席の代替とした。

研修では冒頭、社会のIT化が加速する中で急速に変容する学生気質、とくに「デジタルネイティブ」についてその実態が紹介された。続いて、参加者間で学生気質についての感想や、意見、授業での自身の経験等について意見交換を行った。さらに協同学習の技法、アクティブ・ラーニング、LMSなどのICT環境の導入状況など、豊富な事例や多くの文献の提示とともにインストラクショナルデザインに関するレクチャーが行われた。また、参加者間でそれぞれの授業で工夫している点や困っていること、悩んでいること、今後取り組んでみたいことなどをフランクに語り合う時間も設けられ、それぞれ数名のグループに分かれて、学部や学科を超えて活発な話し合いが行われた。

研修会の参加者からは、前半の現代の学生気質、特にデジタルネイティブについての話題については「現代の学生の背景を認識することができた」「学生理解が重要だと感じた」といった感想が寄せられた。また、後半のインストラクショナルデザインについては「アクティブ・ラーニングの視点から授業改善を行う上での現状と課題について研修できた」「ICT活用等他大学の取り組みを知ることができた」などのコメントが得られた。さらに参加者間での話し合いについては、「他の専門領域の取り組みを知ることができた」「日頃感じていることや疑問に思っていることが他の教員と共有できた」ことで「自分の振り返りにつながる時間になった」といったコメントが得られ、今回の研修に対

して8割の参加者が「大変有意義であった」または「有意義であった」と回答していた。一方で、「あまり有意義でなかった」「有意義でなかった」との回答が合わせて1割弱あり、その理由として内容が多岐に渡っていたため教育実践の具体例に乏しかったことなどが挙げられていた。

今回の研修会では講師よりFD研修会の企画についても言及があったが、それによると「外部講師などによる伝達講習で大学教育についての一般的な知識を共有したうえで、学内教員による事例発表、議論を組み合わせた相互研修を行い、自大学の文脈に根づいた取り組みを共有する」のが有効であるとのことである。実際、今回の研修会の中の数名のグループ討論においても学内の教員同士でそれぞれの授業の工夫や悩みについて白熱した話し合いが行われていた。これをさらに発展させて本学の教員による事例発表などを積極的かつ多角的に実施し、情報交換を行うことで、問題意識をより高次元で共有することが可能となり、FD研修会が様々な解決の方法を検討するための糸口を提供できる場となりうるかもしれない。今後のFD研修会のあり方の課題としたい。

研修会参加者のアンケート結果では、次年度のFD活動において、取り組みを希望する内容については「学力不足学生への学習支援」が最も多く、「リメディアルの実践」という具体的な要望も寄せられていた。その他比較的多数の希望があった項目が「ルーブリック評価」「反転授業」および「アクティブ・ラーニング」であった。教育力向上の取り組みの促進に真に資する全学FD教員研修会とするためには、これらの意見を参考に、本学の文脈に合わせてカスタマイズした企画の検討が求められているといえよう。

文責:藤原 智子 (生活福祉文化学部 生活福祉文化学科 FD 委員)